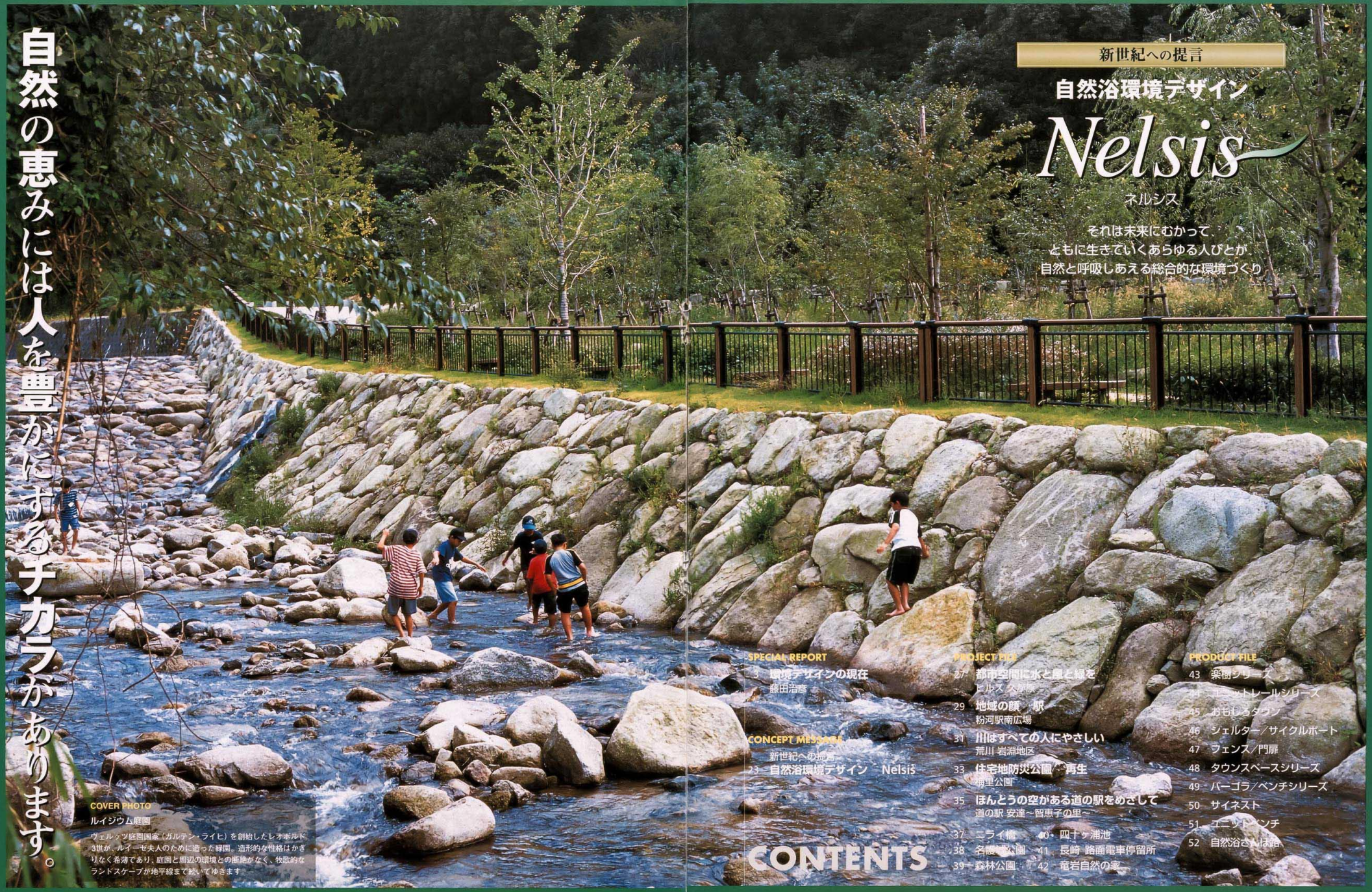
自然浴環境デザイン

Nelsis

自然が未来

TOEX

東洋エクステリア



新世紀への提言

自然浴環境デザイン

Nelsis

ネルシス

それは未来にむかって、
ともに生きていくあらゆる人びとが、
自然と呼吸しあえる総合的な環境づくり

自然の恵みには人を豊かにするチカラがあります。

COVER PHOTO

ルイジウム庭園

ウェルッツ庭園国家（ガルテン・ライヒ）を創始したレオポルド3世が、ルイーゼ夫人のために造った緑園。造形的な性格はかぎりなく希薄であり、庭園と周辺の環境との断絶がなく、牧歌的なランドスケープが地平線まで続いてゆきます。

CONTENTS

SPECIAL REPORT

3 環境デザインの現在
藤田治彦

CONCEPT MESSAGE

新世紀への提言
23 自然浴環境デザイン　Nelsis

PROJECT FILE

27 都市空間に水と星と緑を
ヒルズ久が原
29 地域の顔　駅
粉河駅南広場
31 川はすべての人にやさしい
荒川 岩淵地区
33 住宅地防災公園〜再生
梅里公園
35 ほんとうの空がある道の駅をめざして
道の駅 安達〜智恵子の里〜
37 ニライ橋
38 名護城公園
39 森林公園
40 四十ヶ浦池
41 長崎 路面電車停留所
42 竜岩自然の家

PRODUCT FILE

43 樂樹シリーズ
44 ユニットレールシリーズ
45 おもしろタウン
46 シェルター／サイクルポート
47 フェンス／門扉
48 タウンスペースシリーズ
49 パーゴラ／ベンチシリーズ
50 サイネスト
51 ユニットベンチ
52 自然浴さんぽ路

SPECIAL REPORT

環境デザインの現在

本文／藤田治彦
写真／シラバラ タク

◆ 著者紹介 ◆

藤田治彦（ふじたはるひこ）
大阪大学大学院文学研究科助教授（環境芸術学）学術博士

主たる著書：『ナショナル・トラストの国』（淡交社）、『ウィリアム・モリス』（鹿島出版会）、『ウィリアム・モリスへの旅』（淡交社）、『現代デザイン論』（昭和堂）。
おもな訳書：『近代装飾事典』（岩崎美術社）、『グラフィック・デザイン全史』（淡交社・監訳）。

【サン・スーシー宮殿の森】

プロイセンのベルサイユと呼ばれるこの庭園は、300haの敷地を有し80kmあまりの回遊路がめぐらされています。フリードリッヒ大王が都市の喧騒を嫌いポツダムに建設した離宮であり、閉じた世界に生み出された孤独なユートピアでもあります。しかし時の経過はそうした思惑を離れ、豊かな新緑の輝く中、訪問者は森に迷い込んだ印象を受けます。整備され調整された人工の「自然」環境が育まれているのです。広大な森の中にはバロックやロココ様式の宮殿が点在し、大王のフランス文化への憧憬に満ちています。
by T.Shiobara

■環境の発見

《環境》。現在、新聞紙面やテレビの画面にこの言葉が現われない日はほとんどないといっても過言ではありません。この《環境》の2文字は、中国では遅くとも14世紀の末までには現われており、日本でも決して新しい言葉ではありません。しかし、第二次世界大戦以前はもちろん、戦後になってもしばらくのあいだは、法律用語の一部などには用いられても、例えば書名に使えるような、一般性のある言葉ではなかったのです。

1965年の9月末、第1回『日本インダストリアル・デザイン会議』が上野公園内の東京文化会館で開催され、「インダストリアル・デザインは新しい生活環境の建設によって人間社会の幸福の増進をはかるべきものであり」という文言で始まる声明を採択しました。日本のデザイン分野の大規模な会議で、《環境》という言葉が宣言や声明のキーワードとなった最初のものです。それ以前、1960年に東京で開催された『世界デザイン会議』では、グラフィック、インダストリアル・デザイン、環境という三分野に分かれて討議が進められ、グラフィックとインダストリアル・デザインはいわば環境には遠い位置付けにあったことを思えば、大きな変化でした。

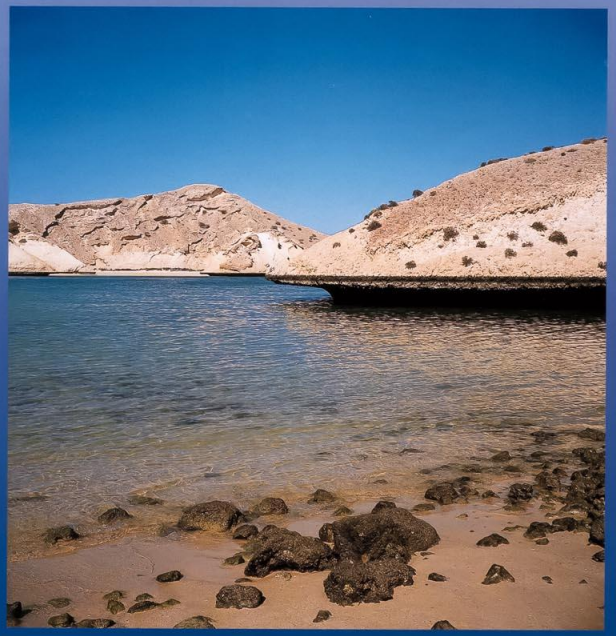
いまではすっかり定着した建築環境工学という建築の研究分野名のひとつを、日本建築学会が正式に使い始めたのも1965年のことです。その前年、建築設計計画規準委員会が環境工学委員会と改称され、それを受けて、同学会の研究年報にその新しい名称が使われ始めたのです。建築環境工学は従来の建築計画原論と建築設備を総括した呼称として確立され、現在に至っています。

日本の高度経済成長、あるいは成長感が頂点に達したのは、東京オリンピックが開催された1964年のことでした。同年には東海道新幹線が営業を始め、名神高速道路が全面開通しました。1960年の『世界デザイン会議』の東京開催も、そのような日本の経済成長期の勢いの産物でした。しかし、その繁栄の裏側では悲惨な公害が日本各地で顕在化していました。地域の急成長と市民の生活の急激な変化に対応できない都市自体あるいは国土全体が、極めて異常な状態にあったのです。

【オマーンの海岸線】

海洋国家オマーンはアラブ諸国で初めて環境省を設立し、国際自然環境保護連合（IUCN）のメンバーでもあります。1700kmに及ぶ海岸線の生態学調査の中でのアオウミガメの保護活動やマングローブ育成計画など、世界的に注目されています。1996年にはカブース国王の自然資源と文化遺産保護の功績にたいしてジョン.C.フィリップ賞が授与されました。また一般市民の環境に対する意識の向上にも力を注いでおり、環境教育やエコ・ツーリズムも盛んにおこなわれています。

by T.Shiobara



■デザインとリサイクル

工業デザイナーや建築家たちは、明治以来の日本の殖産興業政策の結果である第二次世界大戦後の、高度経済成長がピークを過ぎ、そのひずみが顕在化して初めて、産業に代わる環境、……もう少し限定するならば、生活環境という次のテーマを発見したのでした。

公害対策基本法が制定されたのは1967年のことです。《環境》というテーマの発見が意外に早かったと私たちに感じさせるのは、さまざまな環境問題がいまだ未解決どころか、増大の一途をたどっているためでしょう。 近年、環境問題に対するデザイナーの意識は相当高まり、製品やそのパッケージのリサイクルに力を入れる企業も増えました。できるかぎりリサイクル可能な素材を用い、かつリサイクルしやすいデザインをするという考え方は欧米、とくにヨーロッパではかなり徹底されており、日本でも「エコ・デザイン」などと呼ばれて相当な広がりを見せています。最近では、小学校教育の段階でエコロジーやリサイクルといった考え方への学習導入が計られるようになったのです。もはや、デザイン系学科の卒業制作で、単に新しい概念としてプレゼンテーションするような段階ではありません。それはすでにデザイン上の常識、あるいは、基本的チェック項目なのです。

大型家電の回収や再利用を義務付ける「特定家庭用機器の収集・再商品化法」、いわゆる「家電リサイクル法」の施行は目前に迫っており、業界は個々に、あるいは企業グループをつくって、それに対応しようとしています。使用済み大型家電製品を破砕して、鉄、銅、アルミニウムなどの金属、および各種プラスチックなどを回収する試験が各所で行われています。その対象となるのはテレビ、冷蔵庫、洗濯機、エアコンの四品目で、エアコンを除く残りの三品目は、かつての家電ブームの時代、つまり高度経済成長の裏側で公害が広がっていた時期に、「三種の神器」といわれたものです。

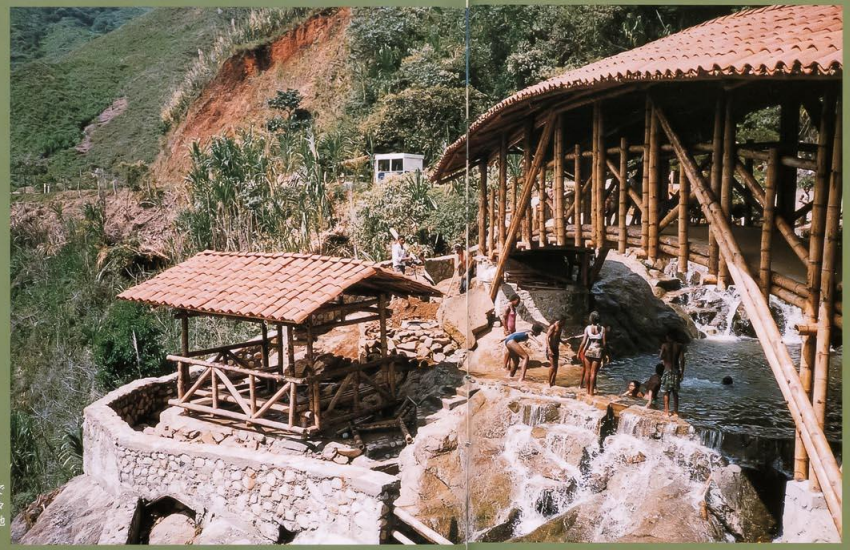
「家電リサイクル法」の施行は2001年の4月です。1971年に東京都江東区で始まったとされる「ごみ戦争」は、大量生産・大量消費の経済が減速した20世紀末になっても終ることなく、近代日本が経験するもっとも長い戦い、30年戦争になることがあらかじめ宣言されたのでした。欧州戦線はすでに次の戦局に移っており、ヨーロッパでは 、製造業者が回収を約束しない自動車は一切製造販売できなくなる日も近いでしょう。

【フェロポリス】

今世紀の建築や都市などの近代遺産をどのように継承・再利用するかが先進諸国の大きな課題となる中で、ドイツでは様々な先駆的プロジェクトが進められています。ザクセン＝アンハルト州デッサウの北ゴルパ地区に広がる採掘場跡地では、砂漠と化した大地に湖を造成し屋外劇場が建設されます。そこで廃墟となっている巨大な掘削機は劇場を取囲む舞台装置として蘇生します。旧東地区ではこうした工場地帯等の跡地を、都市環境の向上と再活性化へのテーマとして意欲的な開発に取組んでいます。

by T.Shiobara

大きな屋根が印象的な、シュタムによる水上パヴィリオン



シュタムの架橋現場で働くコロンビアの人々と、水浴びを楽しむ地元のこどもたち

Photo by JORGE STAMM（bamboo architect）

シュタムが架ける竹の橋には、全長30メートルを超えるものもあります

■ゼロ・エミッション・デザイン

消費者をも巻き込んだ、というよりはむしろ消費者運動に行政や生産の側が促されたかたちのリサイクル以前に、環境汚染防止、省資源などを、まず生産者側が徹底する必要があったことはいうまでもありません。原料をすべて使い切り、廃棄物をまったく出さない製造技術の開発をめざす「ゼロ・エミッション zero emission」という概念がようやくヨーロッパで生まれたのは、1990年代になってからのことです。概念としてはヨーロッパ生まれですが、それを国連大学が取り上げ、1995年に「廃棄物ゼロ」計画を提唱して以来、川崎市や北九州市などの地方自治体が「ゼロ・エミッション工業団地」の試みを始めるなど、日本はこの「ゼロ・エミッション」運動に先導的な役割を果たしています。ある産業の生産プロセスから出る廃棄物を別の産業の原料として活用する完全リサイクル型の生産システムをつくりだす試みが、工業団地などのかたちをとって進められつつあります。見方を変えれば、大きな工業生産力を有するだけに、日本のような国は「ゼロ・エミッション」生産の模範を世界に示す義務があるということでしょう。

■環境ボランティア

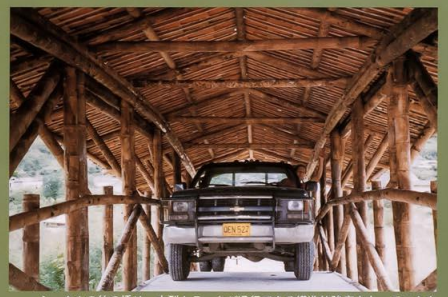
「ゼロ・エミッション」を追究しているのは工業国だけではありません。例えば、竹で住宅からハノーファー世界博覧会の大規模なパヴィリオンまでつくってしまう南米コロンビアの“バンブー・アーキテクト”シモン・ベレスは「ゼロ・エミッション建築家」でもあります。成長の早い竹は、熱帯や亜熱帯地方の理想的建築材料であり、有害な廃棄物を出しません。また、彼が考案したジョイント法を用いれば、バンブー・ビルディングは地震にも強いのです。同時に、亜熱帯地方は住宅問題の深刻な人口急増地帯でもあり、さまざまな意味を込めて、彼らは「竹は世界を救う」とさえ主張しています。ベレスは最近、日本の匠から、竹をいぶして腐りにくくする方法を学んだと喜んでいました。

近年注目を集め、ヨーロッパでもワークショップやデモンストレーションを行なうことも多いベレスには、一種の取り巻きグループがあります。いわば「竹で世界を救おう」と世界各地から集まった若者たちのボランティア・グループです。

ドイツ出身のヨルゲ・シュタムはベレスの取り巻きのひとりというよりは、南米へ渡ったヨーロッパ人ボランティアであり、竹で30メートルという大スパンの、しかも実に美しい橋を山間の村々に架け、コロンビアの人々に感謝されています。シュタムがコロンビアへ渡ったのは、実はある美しいコロンビア娘に魅せられてのことだったそうです。彼はいまでは、独自に屋根付きの大規模な橋を架け、建物をつくり、ベレスの協力者としても活躍しています。

コンクリートまたはセメントを詰めた接合部は、ベレスの考案に基づいています

コロンビアでは長大な竹が容易に入手でき、その意味でも理想的な建材です



シュタムの竹の橋は、小型トラックが通行できる構造的強度をもっています

【緑の住宅】

有機的フォルム、豊かなグリーン、エネルギーのリサイクルという３つの要素がエコロジカルな家の特徴です。それは「家」が閉鎖的な箱ではなく、自然へ向けての壁を排した開放系であることを意味しています。それは人工的な都市というものに対して、自然を呼び込んだ住環境としての「人の住める都市づくり」を目ざしているのです。ドイツでは都心の開発にもハウジングの比率を多くする傾向にあり、生活者のアクセスは日本に比べると格段に良いものです。

by T.Shiobara

【バルセロナの街づくり】

1992年に開催したオリンピック・パラリンピック以前の1989年に改正された都市基準法によって、すべての公共施設には車いすがアクセスできる設備を備えなければならなくなりました。地下に幹線道路を通しその上に公園をつくるなど、人を大切にする街づくりが推進されています。 Photo by Asa Kitamura

もともと雨が少なく、過ごしやすい地中海気候。街のいたるところに設置されているベンチは、屋外でのコミュニケーションを大切にするバルセロナの人々にとってなくてはならないエレメントです

街角のちょっとした空地は「立入禁止」にするのではなく、駐車防止のためのフラワーポットのみを設置した憩いの空間へ

市内のほとんどのバス停はシェルター付き。強い日差しから守ってくれます

早くから導入されたノンステップバス。立地条件が悪いバス停には、容易な乗り降りのためのプラットホームがついています

■バリアフリー

今日、工業国、農業国の違いを越えて、このように追究されつつあるのがリサイクルを考慮したデザイン、あるいは「ゼロ・エミッション」のデザインであり、環境ボランティアたちは国境を越えて活躍していますが、この地上には、国境よりも越えにくい、小さなボーダーやバリアが無数に存在しています。具体的な例をあげれば、小さなこどもやお年寄り、あるいは障害をもつ人などには越えられない階段の大きな段差等であり、例えば、それを考慮した家を「バリアフリー barrier free」住宅と呼んだりします。

しかし、その言葉が意味するのは、いうまでもなく段差をなくすことだけではありません。「バリアフリー」は、弱い立場にある人々が、社会のなかで生活を営む上で妨げとなる身体的・精神的な障壁を取り除こうという理念を表す言葉です。この「バリアフリー」は、障害をもつ人でも、ひとりの市民として普通に暮らせる社会づくりをめざそうという、「ノーマライゼーション normalization」の理念に基づいています。

■ノーマライゼーション

「ノーマライゼーション」は障害をもつ人が特別視されることのない社会や生活環境をつくる運動であり、いわば、障害者を考慮にいれずに成立している社会こそが異常であり、障害というものはむしろ社会環境がつくっているのだ、という理解に基づいています。

「ノーマライゼーション」は1960年代に北欧で始められた運動でした。アメリカや日本などの先進工業国が、公害など、物理的環境の異常に気付き始めたころ、デンマークやスウェーデンのような北欧の社会福祉、社会保証制度の先進国では、社会的環境の異常が問題になっていたのです。1960年代は、二重の意味で、環境の発見の時代でありました。

経済大国で先進工業国のひとつである日本は、「ノーマライゼーション」後進国です。「高齢者、身体障害者等が円滑に利用できる特定建築物の建築促進に関する法律」である通称「ハートビル法」が施行されたのは1994年になってからのことです。この法律によって、不特定多数の人々が利用する病院、劇場、集会場、百貨店、ホテルなどの公共性の高い建築物を、ハンディキャップをもった人々が円滑に利用できるようにするための建築的基準が、ようやく定められたのでした。

■ユニバーサル・デザイン

「ハートビル法」に準拠した公共的建築物は、障害をもつ人のためだけに設計されたのではなく、障害のある人もない人も区別なく、できるかぎり多くの人が共通に使えるように設計された施設です。このような設計を「ユニバーサル・デザイン universal design」と呼ぶことがあります。例えば、鉄道駅などに備えられた車いす対応型のエスカレーターが、「バリアフリー」とまではいかないものの、バリアを低減するものであるのに対して、駅のエレベーターは、同法施行以前から使われている「ユニバーサル・デザイン」の一例です。その理念上、「ユニバーサル・デザイン」は、障害のある人もない人も区別なく、便利に使える物や施設や空間のデザインをさすわけですから、車いす利用者の使用時に一般歩行者が一時的にでも利用できなくなるエスカレーターは「ユニバーサル・デザイン」とはいえません。だからといって、エレベーターが設置されてさえいれば、それは「ユニバーサル・デザイン」の駅だといえるわけでもありません。エレベーターの位置が遠くてわかりずらかったり、そこに至る途中、点字ブロックが必要な視覚障害者や車いす利用者にとってはやや危険な場所があったり、ようやくたどりついたかと思うと、点字シールの位置や記載内容に問題があったりすることも時としてあります。

「バリアフリー」のデザインと「ユニバーサル・デザイン」とは、少なくとも日本では、概念上厳密に区別されているとはいえません。例えば、車道と歩道との段差をなくすか、その継ぎ目を車いすなどでも楽に通過できるようにした舗道は「バリアフリー舗道（歩道）」と呼ばれています。これなどは、車いす使用者やお年寄りにとっての障害を取り除いたというだけではなく、その他の人々にとっても自転車を降りずに車道から歩道へ、そして再び車道へと行けるといった利点こそあれ、大きな不便を生じさせているわけではないのだから、むしろ「ユニバーサル・デザイン」の一例です。（ただし、最近多い、止ることを知らぬ自転車が歩行者等の迷惑にならぬよう注意してほしいものです）。

国が補助金を出している地方自治体などの予算が適正に執行されているかどうかを検査する会計検査院が、最近、この「バリアフリー舗道」の過半数が危険だと指摘しました。歩道を車道に向かって次第に緩やかに下げている舗道なのですが、歩道を行く車いすが実際にその「バリアフリー」部分を通過しようとすると、その車体が自然と低い車道側に向かってしまい、容易にもとのコースに戻れず、危険だというのです。早速、建設省はより適切な基準づくりにのりだしました。適切な基準が示されるのはもちろん望ましいことですが、それがマニュアル化してしまい、傾斜角度その他の数値だけがひとり歩きした「バリアフリー」施設や「ハートビル法」認定施設がつくられるようになるのは怖いことです。「バリアフリー」「ハートビル」といったカタカナ語が、エッチングされた真新しいメタルプレートが埋め込まれた施設で、車いすが立ち往生しているといったような光景が現実のものとならないようにするには、無責任な手引き（マニュアル）化ではなく、その施設をつくるひとりひとりが責任をもって—実際には機械生産、機械施工ではあっても—精神としては、ひとつひとつ手作り（ハンドメイド）化することです。

海岸沿いにあるリトラル公園。敷地内に縦断する幹線道路は地上レベルから掘り下げた低い位置にあります。街と海を視覚的に遮断しないばかりか、安全な道路の横断を車の騒音も少なくする効果があるこの工法は、街全体で採用されています

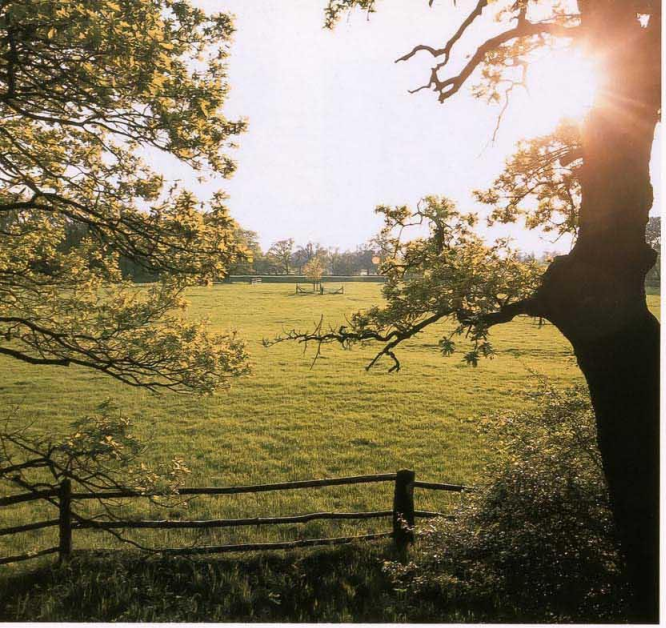
住宅ゾーンの立体地図。弱視・盲目者が販売する宝くじの発行組織「スペイン盲人協会」が、その収益で設置したもの

住宅ゾーンにある広場のひとつ。床面は完全といえるほどにフラットな仕上がり。ベンチやアート、噴水が配されています

広場の一画に設けられた、こどもが自由に遊べるアートオブジェ的な遊具

車いすでも砂浜までアクセスが可能なボードウォーク。もちろん無料のシャワーも利用できます

オリンピック村メイン道路の縁石。歩道と車道の段差をなくすため、縁石だけを持ち上げて車の進入を防いでいます



■エンヴァイラメンタリズム

《環境》の名を冠すれば、いま私たちが大切に（あるいは問題に）しようとしている環境を対象にしたことになるのかというとそうではありません。現在もっとも一般的に用いられている「エンヴァイラメント」という言葉が《環境》を表わす言葉として定着したのは、欧米（英米）でも1960年代前後からのことであり、それまでは「サラウンディングズ」などがほぼ互換性のある言葉として用いられていました。とはいえ、かつての日本ではそうだったのですが、「スペース」が「エンヴァイラメント」と互換的に使われているような例は欧米ではほとんどありません。《環境》は、あくまでも、まずそこに何らかの生活体があって、それが行動すべき場所の総体を意味します。《空間》は、それに対して、同質的で連続的な三次元の広がりなのです。高度経済成長期のピークにあった日本では、建築設計の規模の拡大がそのまま都市の設計であり、環境設計なのだと受け取られていた一時期があったといって過言ではありません。

欧米では、近年「エンヴァイラメンタリズム Environmentalism」といった言葉も使われています。「環境保護」あるいは「環境保護思想」を意味していますが、これは一種の新語です。その言葉自体はすでにあったものですが、その場合は、人間をはじめとするすべての有機体の存在状態の類型は環境によって因果律的に決定されるという「環境論」、つまり「環境決定論」の思想を意味するものでした。あるいは、遺伝と環境を対立概念とし、後者を重視する「環境主義」です。現在、かなり知られるようになっている「環境保護思想」としての「エンヴァイラメンタリズム」は、1960年代以来のエコロジーの大きなうねりの下で、湖底の毬藻のように、時とともに育まれてきた言葉なのです。

以上のような「リサイクル」「ノーマライゼーション」「バリアフリー」「エンヴァイラメンタリズム」といった概念のほとんどは、行政や生産者の側から出たものではなく、消費者あるいは市民運動のなかから生じたものでした。「ゼロ・エミッション」と「ユニバーサル・デザイン」は、むしろ生産者ないし制作者の側から広がった概念ですが、それぞれ「草の根」的な環境思想や社会福祉思想に共鳴した産業家と建築家の発想になるものです。“図”が“地”に勝る時代には影の存在であった《環境》は、いま世界を変えつつあります。20世紀の環境思想そしてボランティア思想のゆりかごともなった、環境保護のための先駆的市民団体、イギリスの『ナショナル・トラスト』の歴史の概略と現状に触れて、本論を結ぶことにしましょう。

【ヴェルリッツ庭園国家】

ザクセン・アンハルト州テッサウのエルベ河畔に18世紀に生まれた庭園都市。数百km²に及ぶ全体は庭園の集合体でもあり、庭園部と都市・田園部との景観の断絶がなく、牧歌的な光景が地平線までつづいてゆきます。レオポルド3世とF.エルドマンスドルフらにより、環境、教育、芸術などを啓蒙主義的な理念のもとに総括したランドスケープワークの試みでもあります。東西ドイツの統一後、この旧東地区にあるヨーロッパ大陸最大とも言われる英国式庭園の全貌が公開されることとなりました。

by T.Shiobara

【シシングハースト Sissimghurst Castle Garden ケント】

庭の国イギリスのなかでもっとも有名な庭。ケントを代表する名園。ホワイト・ガーデン、ローズガーデン、コテージ・ガーデン、ヘーブ・ガーデンなどからなります。古色を感じさせますが、エリザベス女王時代の塔など、いわば遺構を甦らせた20世紀の庭園です。 by H.Fujita

© The National Trust Photographic Library / Andrew Lawson

【スタウアヘッド Stourhead ウィルトシャー】
いわば回遊式ですが、日本庭園にはない壮大さをもつウィルトシャーの風景式庭園です。人造湖のかなたに見える、パンテオンやアーチ造の石の橋など、17世紀の風景画家、クロード・ロランが描いたような要素がちりばめています。
by H.Fujita
© The National Trust Photographic Library / Nick Meers

© The National Trust Photographic Library / Oliver Benn

■環境の保護と新しい社会

《環境》の語を旗印とはしませんでしたが、環境保護の「エンヴァイラメンタリズム」を先導した代表的組織のひとつがイギリスの『ナショナル・トラスト』です。正式には「歴史的名勝および自然的景勝地のためのナショナル・トラスト The National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty」といい、民間から基金を募り、または寄贈を受けて、貴重な自然環境や歴史的環境を保存管理して公開する市民運動として始まりました。これが、いまでは環境保護運動の代名詞のようになって、日本を含む全世界で使われ、枚挙しきれないほどの数の『ナショナル・トラスト』が世界各地に運動あるいは組織として存在します。

本家イギリスの『ナショナル・トラスト』は1895年に生まれ、創設からすでに1世紀を経ており、その会員数は1998年に260万人を越えました。私のような海外会員をも含めた数字とはいえ、イギリスの人口が5800万に満たないことを考えれば、その割合は非常に高いのです。しかも、前年に比べ3.4%増というのですから、イギリス人の20人にひとりが『ナショナル・トラスト』の会員という時代は目前です。自然保護地域などを含む400箇所を遥かに越える学術研究上の価値を有する地域、162の歴史的邸館、183の庭園と93の風景式大公園など、『ナショナル・トラスト』の所有地総面積は24万ヘクタールにのぼります。そのなかには、ストウやシシングハーストといったイングリッシュ・ガーデンの数々の名園や、ウィンストン・チャーチルをはじめとする著名人ゆかりの家々も含まれています。

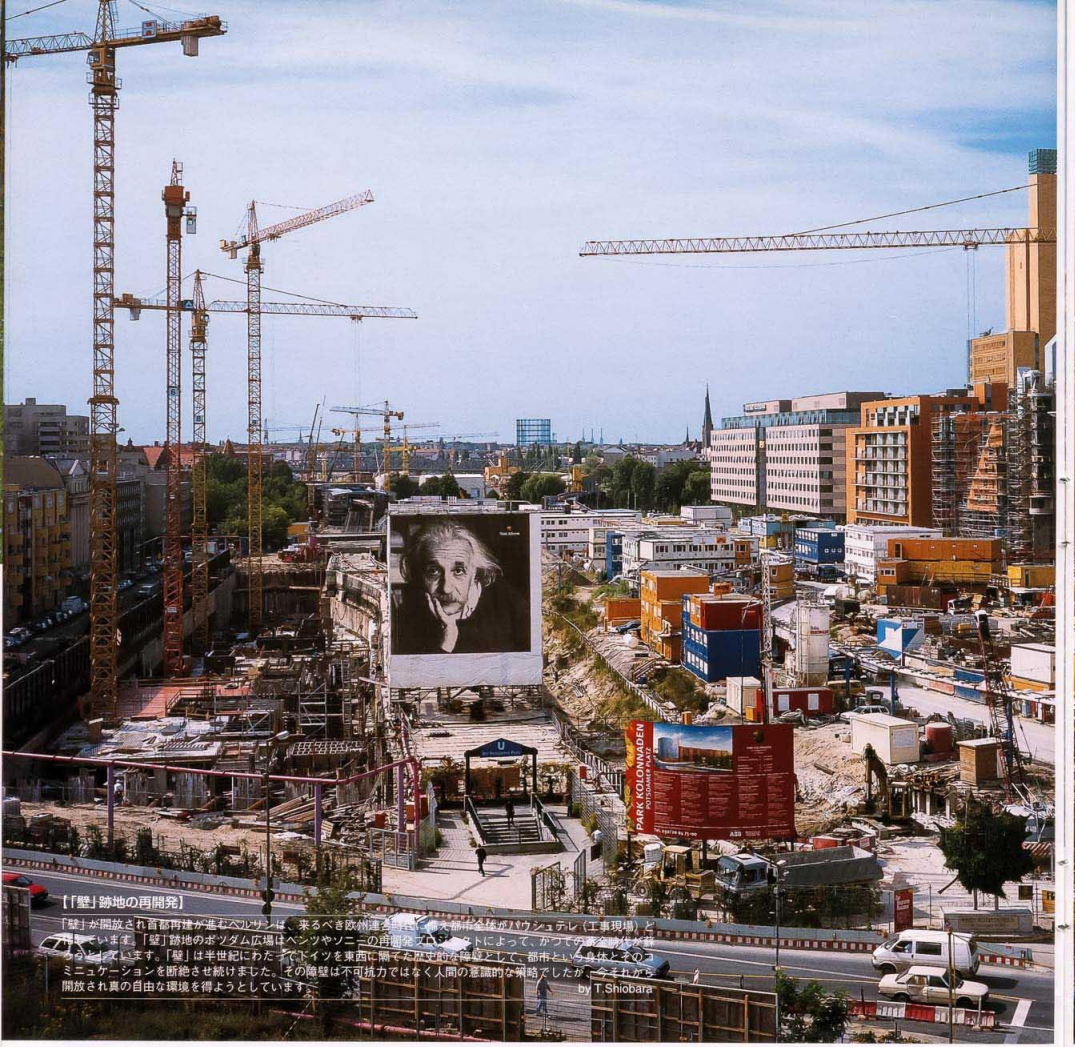
その運動の広がりと力強さをもっとも実感させるのは、何といっても保有海岸線の長さではないでしょうか。1965年に始められたネプチューン計画によって『ナショナル・トラスト』の保護下に置かれた海岸線の全長は575マイル（約925キロメートル）で、スコットランドを除くイギリス全土の海岸線の18パーセントを占めています。東京から広島までの新幹線営業距離がおよそ894キロメートルであることを考えれば、その運動のスケールの大きさがわかります。『ナショナル・トラスト』は環境保護運動であるとともに、21世紀の新しい社会のあり方を示す運動でもあります。

【パックウッドハウス Packwood House ウォリックシャー】
美しい薔薇の生垣などで知られるウォリックシャーの名園です。背景をなす西洋いちいの庭はキリストがガリラヤ湖畔の山上から弟子たちに正義と愛について説いた「山上の垂訓」を表現したとされます。
by H.Fujita
© The National Trust Photographic Library / Stephen Robson

【シシングハースト Sissimghurst Castle Garden ケント】
© The National Trust Photographic Library / Andrew Lawson

【ストウ・ランドスケープ・ガーデンズ Stowe Landscape Gardens バッキンガムシャー】
いまではイギリスを代表する風景式のバッキンガムシャーの名園ですが、形式庭園を改造したもので、所々シンメトリーのなごりを感じさせます。パッラーディオ式とされる屋根のある石橋など、さまざまな人工物が随所に散在し、緑の自然と好対照を成しています。
by H.Fujita
© The National Trust Photographic Library / Andrew Butler

© The National Trust Photographic Library / Andrew Butler



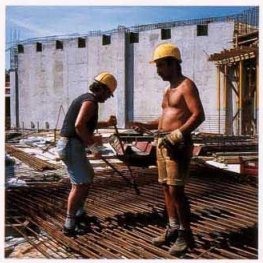
【「壁」跡地の再開発】
「壁」が開放され首都再建が進むベルリンは、来るべき欧州連合時代の大都市全体がバウシュテレ（工事現場）と化しています。「壁」跡地のポツダム広場はベンツやソニーの再開発プロジェクトによって、かつての景観が蘇ろうとしています。「壁」は半世紀にわたってドイツを東西に隔てた歴史的な障壁として、都市という身体とそのコミュニケーションを断絶させ続けました。その障壁は不可抗力ではなく人間の意識的な策略でしたが、今それから開放され真の自由な環境を得ようとしています。
by T.Shiobara

■《環境》は世界を変える

《環境》という言葉は、私たちが近代社会に生き始めて以来（日本では明治維新以来）未解決だった問題に数十年前に最終的に直面して、多かれ少なかれ、数ある候補のなかからまず語感で求められ、その後、激動の現代史のなかで少しづつその意味を確定していったものです。英語の「エンヴァイラメント」などの場合も同様であり、語源学的に確定できるものではありません。それは、それぞれの領域で探究を続けるさまざまな分野の人々の対話の結果であり、その理念とデザインをめぐる探究と対話は、一般市民をもその輪に含めて、いまでも続いています。

「エンヴァイラメント」— 日本では《環境》— という言葉は、洋の東西を問わず、次第に一種の流行語にもなり、環境問題が深刻さを加える20世紀末には、それがニュースから消える日をまちたいほど、社会に定着した言葉になりました。しかし、《環境》という言葉は、単に流布しているだけではなく、明らかに私たちの世界感覚を変えつつあります。それは、地球規模で考えることの重要性と、私たちひとりひとりの日常生活の意義とをともに自覚させます。そして、その大きな宇宙と個人の世界の小さな宇宙とが直接につながっていることをもっとも強く感じさせる言葉なのです。その《環境》という概念を大切にしたいと考える人々の多くが、そして《環境》にかかわるすべてのデザイナーがいま強く望んでいることは、その《環境》という言葉を、生命感の欠けた守りだけの言葉にはしたくない、ということでしょう。

《環境》は、世界を変える。



◆新世紀への提言

「自然浴環境デザイン —Nelsis— の創造」

ネルシス

TOEXが考える
自然浴環境の形成に必要なこと…

Environment
人間らしく豊かで安全な
環境づくり

Scene
人と自然が互いに呼吸する
場面づくり

Element
自然の恵みをとり入れた
製品づくり

「環境」の大切さ

私たちは自然と人間が深く呼吸しあえる本来の心地よさ、安らぎを大切に考えます。たとえば公園ーそこに集う人々は本当に安らぎの時を過ごせているのだろうか、本来の安らぎの空間を私たちは創り出しているのだろうかと。一般的にエクステリアマーケットでは「景観」という言葉を耳にします。しかし私たちは、あえて「環境」エクステリアと呼んでいます。その理由は、「景観」は造られたモノで構成された風景的空間という印象を感じるのに対して、「環境」は生まれ出たモノによって構成していく人間的空間、と考えるからです。自然の原理・法則の中で生活をするという本当の心地よさ、快適さが見失われつつある今、私たちは「自然」の素晴らしさ、「環境」の大切さを深く認識し、空間創造と製品開発に取り組む姿勢を持ち続けてきました。本来、「環境」は絶えず循環していくものです。その循環の乱れによる環境問題が顕著になり始めたここ数年、「環境」や「自然」の大切さに立ち戻り、地球的規模でエコロジー活動が行われるようになりました。私たちも、これまで以上の循環型企業をめざしたシステムづくりを推進していきます。

「ユニバーサルデザイン」の推進

環境問題とともに大いに意識が高まっていること、それは「医療福祉」に関する問題です。我が国での福祉対策は、国際的に著しく立ち後れてきました。21世紀には日本人の4人に1人が65歳以上になると言われている今、迅速な対応が必要であるということは、すでに言うまでもありません。しかし、単純に「高齢者用」「障害者用」だからといって、マニュアルの基準数値ばかりを追い求めた無責任な製品開発や空間設計は、よけいに不便な空間を造りだすばかりではなく、利用者に混乱や危険を招くおそれがあります。また、「高齢者」「障害者」という言葉自体も、漠然とした安易な総称に過ぎません。この社会を構成し、未来にむかってともに生きていく私たちの使命は、今こそ本来の人間的視点に立ち戻った製品開発と空間づくりにほかなりません。それはつまり、障壁を取り除くというバリアフリーではなく、すべての人のためのユニバーサルデザインの推進です。機能性の追求だけではなく人間性の追求、人として本当に快適な生活をおくるための空間づくり。
それが私たちの、次世紀に向けたすべての創造の原点です。

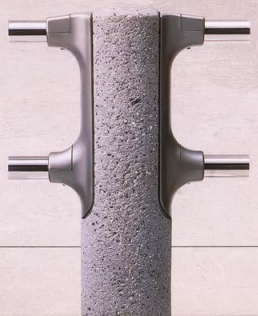
「環境」で遊び、「環境」に学ぶ

遊びの空間、特に公園で楽しむモノと言えば、遊具を思いつきます。昔ながらのブランコから最近はモジュール式の大型複合遊具施設まで、多種多様なものが公園にあります。私たちは現在、このような一般的な遊具は商品アイテムとして持っていません。なぜならばそれは、すでに遊び方が決められているもの、ただそれで遊ぶだけのものでは、「環境」をテーマとしている私たちの考える遊具とは言えないからです。本来の遊びや楽しむための遊具とは何だろうか。それは決して一方的に与えるものではなく、「環境」の中で楽しみ、何かを学び、心身ともに豊かになることをサポートするものでなくてはならない、と考えています。たとえば「遊ぶ」という行為の中で、自然界の法則を学ぶことができるもの、心やからだがリフレッシュされるもの、また歴史や文化を伝承していくものなどを創り出すことです。単なるハードとしての遊具ではなく「環境」に一歩踏み込みこんだ「環境遊具」は、感性豊かな子どもたちのみならず、あらゆる人々の心身を癒し、学び、憩う、本来の人間的空間を創り出す要素のひとつとして、今後の製品開発の必要性を感じています。

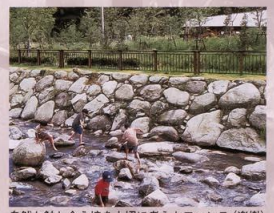
「空間価値提案型」の製品開発

これからの「空間」の意味は、「目的提供型」から「価値創造型」へと変化していくのではないでしょか。たとえば公園、河川敷、森林などに設置されるサイクリングコースを例に見てみると、これまでは健康的で快適なサイクリングのために、自然を利用した眺望のすばらしいコースを備えることが目的でした。しかし、その空間に複合的な意味を持たせたとき、人々にとって豊かな価値を自ら創造していく空間となり得ます。それは、街を結び人や情報が交流する地域連絡道であったり、ジョキングやウォーキングも楽しめるといったコミュニティーロードなど、地域に根ざした価値ある空間として成長していきます。そして、空間が新しい意味を持つとき、そこに適した新しいエクステリアが必要となります。私たちは、設計された空間において必然的に必要となる製品を優れた品質で開発していくだけではなく、空間の新しい使い方や価値を提案していく「空間価値提案型」の製品開発をおこなっています。新製品「自然浴さんぽ路」は、人の治癒力を高めるという福祉的な効果を併せ持った、公園などの「空間価値提案型」として開発した製品のひとつです。

ごみ焼却灰の無害化・再資源化を実現したリサイクル材「結晶質スラグ骨材」を採用するなど、環境の保護と資源の再利用を推進しています。



〈ユニットレール1型〉を応用したバイク進入防止ゲート



自然と触れ合う境を大切に考えたフェンス〈楽樹〉

自然の空気をいっぱいに吸いこみながら、治癒力を高める〈自然浴さんぽ路〉

自然浴環境デザイン

それは未来にむかって、ともに生きていくあらゆる人びとが、
自然と呼吸しあえる総合的な環境づくり

「自然浴環境デザイン－Nelsis－」の創造

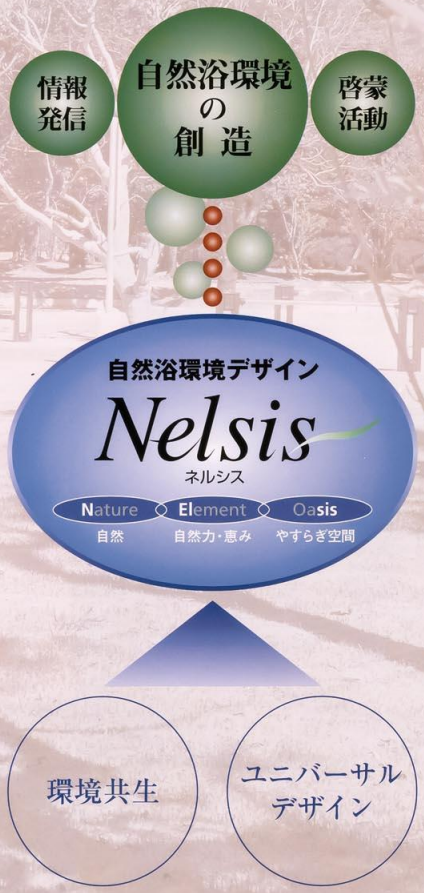
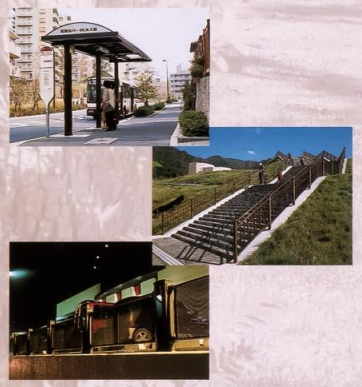
本来、人間は生活の中に「自然」を求めます。しかし自然の中ですべてを生活するということは、今日では現実的に不可能となりました。そこで私たちは、日常の暮らしに自然界の恵みをとり入れた健康で心豊かな環境づくり"自然浴生活のすすめ"を企業理念として、1996年を「自然浴による価値創造元年」と名づけました。以来、住宅エクステリア事業、環境エクステリア事業のそれぞれのマーケットにおいて"健康とくつろぎ"空間を創造する生活産業型企業の構築をめざし、製品開発、啓蒙活動、情報発信をおこなってきました。そして、やがて訪れる21世紀。いま私たち環境エクステリア事業は、さらなる空間価値創造型企業をめざし新世紀へ向けた新たなる理念「自然浴環境デザイン　Nelsis －ネルシス－」を提言します。「自然の力、恵み<Nature、Element>を取り入れた、やすらぎの空間<Oasis>」を語源とした「Nelsis －ネルシス－」。それは、さまざまな人が共に生きていく公共空間において、心とからだを休める「憩い」、心とからだを刺激する「癒し」、心とからだで体験する「学び」という自然浴環境を形成し、あらゆる人が自然と呼吸しあえる場面を創造していくことです。公共空間における"あたりまえの安全性と快適性"が保たれてこそ実現する空間「Nelsis －ネルシス－」は、新世紀に向けての幅広い製品開発と総合的な自然浴環境づくりを総称した、私たちの環境エクステリア事業における指針です。

人と自然が互いに呼吸する場面づくり

Relaxasion
心とからだを休める
「憩い」の自然浴

Refresh
心とからだを刺激する
「癒し」の自然浴

Play & Learning
心とからだで体験する
「学び」の自然浴



あたりまえの安全性と快適性
TOEX環境エクステリアプロダクツ